

大空 (生徒・保護者向け) 62号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 校長通信

令和4年3月1日(火)

「一粒の麦」となれ—中村哲医師の生き方—(高校卒業式式辞)

□本日の概要

- 大人になるということは、自分を支えてくれていた「見えない手」が見えるようになることであり、そして、今度は、自分が誰かを支える見えない手になろうと決意することである。
- 医師の中村哲さんは、アフガニスタン支援の中、医療の限界を悟り、用水路建設に尽力したが銃撃されて亡くなった。しかし、中村さんの蒔いた麦はしっかりと育ち、中村さんの意思を継ぐ人々が育っている。
- 皆さんは、可能性という畑に蒔かれた、一粒の麦である。踏まれても、踏まれても、大きく育ち、多くの実りをもたらして欲しい。
- 本日のNFC 感性 行動力 自他肯定力 協働力 想像力 道徳心

□保護者の皆様への感謝

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。また、お子様の成長を見守られ続けた保護者の皆様におかれましても、今日の感慨はひとしおのことと思います。特に、この46期生の皆さんは、新型コロナウイルスのため、最も大きな影響を受けた学年と言っても過言ではありません。特に昨年度は、新型コロナウイルスの感染が拡大し、高校総体や、楽しみにしていた修学旅行などの多くの大切な行事が中止になりました。保護者の皆様におかれましても、学校行事や部活動の応援などに参加することができなくなり、学校や生徒の様子が良く分からない日々が続く、大変不安だったのではないかと拝察します。そんな中、私たち教職員が生徒の指導に全力を尽くすことができましたのは、保護者の皆様のご理解とご協力あつての賜です。この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

□見えない手

さて、人生100年の時代になりましたが、人生の意味が分かるのは、ある程度時間が経って、過去を振り返った時かもしれません。茨木のり子さんの詩に、「知命」という作品がありますが、「知命」とは、論語が出典で50歳の意味です。この詩には、50歳、すなわち、人生の折り返し点を過ぎてから、自分の人生を振り返った時の思いが込められています。

知 命

茨木のり子

他のひとがやってきて
この小包の紐 どうしたら
ほどけるかしらと言う

他のひとがやってきては
こんがらかった糸の束
なんとかしてよ と言う

鉄で切れいと進言するが

肯じない
仕方なく手伝う もそもそと

生きているよしみに
こういうのが生きてるってこと
おおよそか それにしてもあんまりな

まきこまれ
ふりまわされて
くたびれはてて

ある日 卒然と悟らされる
もしかしたら たぶんそう
沢山のやさしい手が添えられたのだ

一人で処理してきたと思っている
わたくしの幾つかの結節点にも
今日までそれと気づかせぬほどのさりげなさで

この詩の中で私がはっとしたのは、「沢山のやさしい手」が「一人で処理してきたと思っている結節点」に「それと気づかせぬほどのさりげなさ」で「添えられてたのだ」という部分です。皆さんは、今まで自分一人の力で様々なことを成し遂げてきたと思っているかもしれませんが、しかし、実は、自分一人で処理してきたと思っていた人生の様々なポイントには、実は見えない手が添えられ、そっと支えていてくれたのです。

私は、大人になるということは、この見えない手が見えるようになること、そして、今度は、自分が誰かを支える見えない手になろうと決意することだと思っています。

□中村哲医師の生き方

今日は、多くの人を支える「見えない手」となった、ある日本人を紹介します。

中村哲さんは、1946年に福岡県に生まれました。九州大学医学部を卒業し、医師となり佐賀県や福岡県の病院に勤務した後、登山隊の医師としてアフガニスタンとパキスタンの国境付近を訪れます。このことが中村さんの人生の転機になります。医者に診てもらおうことができない多くの人の存在を知った中村さんは、1984年、37歳の時にパキスタンのペシャワールという町にある病院で働き始めました。十分な医療設備もなく、苦勞の連続でした。また、パキスタンのすぐ西側にはアフガニスタンが位置しています。アフガニスタンでの戦争から逃れてきた難民が多く、中村さんは、アフガニスタン側にも病院を作る必要があると考え、少しずつ診療所の数を増やしていきました。

ところが、2000年にアフガニスタンで大干ばつが発生します。雨は降らず、畑はひび割れてしまいました。水がない村の子供たちは泥水を飲み、体を壊して次々と死んでいきました。「もはや病気の治療どころではない。まず水が必要だ。」中村さんは井戸を掘り始め、掘った井戸は1600カ

所にも上りました。しかし、その井戸も地下水が枯れて水が出なくなってしまう。残された手段は、水が豊富な大河から用水路を掘って水を引くことだけでした。

中村さんは大きな決断をします。2003年、「緑の大地計画」として、アフガニスタン東部を流れるクナル川に用水路を作り始めました。このとき、中村さんは56歳です。中村さんは医者ですので、用水路の設計や建設のことは分かりません。本を読んで勉強をして、大きな重機の運転技術も身につけ、最前線で村人とともに働き続けました。もちろん、大事業ですので、中村さん一人だけでは不可能です。福岡市にあるNGO「ベシャワール会」が中村さんを応援し、全国の会員が給料や年金から少しずつお金を寄付して資金を援助しました。日本の善意が、用水路を作る原動力となったのです。

用水路の完成には7年かかり、マルワリード用水路と名付けられました。現地の言葉で真珠という意味です。不毛の大地を潤す用水路は、日の光を反射して、本当に真珠のように輝いて見えるのでした。近くの村々では、畑で作物が取れるようになりました。用水路の終点は、多くの旅人が命を落とし、地元では死の谷と呼ばれるガンベリ砂漠でしたが、今はその砂漠の一部は畑になり、作物が収穫できるほどになったのです。

中村さんの下には、次々と住民たちからの願いが寄せられ、中村さんは用水路を増やしていきました。砂漠が畑に変わり、作物が取れるようになった土地の広さは、計算すると、福岡市の半分ほどの面積になるそうです。

中村さんの功績をたたえ、アフガニスタンの大統領は2018年、中村さんに国家勲章を授与しました。中村さんは、さらに現地に用水路建設の知識や技術を広めるための訓練所をつくり、後継者育成に力を注ぎ、活動の範囲を広げていったのです。

2019年、中村さんはいつものように工事現場に向かっていた。しかし、その中村さんの車を武装集団が襲ったのです。中村さんは銃撃されて亡くなりました。73歳でした。アフガニスタンの人々のために尽力し、今後もアフガニスタンに必要な中村さんを、誰が、なぜ、狙ったのか、その真相は今も分かっていません。

アフガニスタンの人々が戦争や暴力を好んでいるわけではありません。私たちと同じように、平和を望んでいます。しかし、水がないため作物が作れません。給料を貰って家族にご飯を食べさせるためには軍隊に入るしか方法がないのです。人々は、「中村さんのおかげで、作物が作れるようになったから、銃を持たなくてよくなった」とうれしそうに話したそうです。中村さんは、「平和には戦争以上の力があり、平和には戦争以上の忍耐と努力がある」と繰り返し語っていました。

□一粒の麦

シンガーソングライターのさだまさしさんは、海外で人道支援に力を尽くす人々を「風にたつライオン」とたたえ、歌ってきました。そして、2015年には「風にたつライオン基金」を立ち上げ、国内外で医療や災害復旧に携わる人々を支援しています。さださんは、中村さんを追悼して、「一粒の麦」という曲を作りました。

一粒の麦を大地に蒔いたよ
ジャラーラーバードの空は蒼く澄んで
踏まれ踏まれ続けていつかその麦は
砂漠を緑に染めるだろう

戦いに疲れ果てた貧しい人達には

診療所より一筋の水路が欲しい
水があればきっと人は生きられるだろう
諍（いさか）いを止める手立てに

M o m e n t
薬で貧しさは治せない
M o m e n t
武器で平和を買うことは出来ない
M o m e n t
けれど決して諦めてはならない

一粒の麦の 棺を担う人に
伝えてよ 悲しんではいけないと

この星の長い時の流れの中で
百年など一瞬のこと

ベシャワールの山の向こうの見果てぬ夢以外に
伝えたいことは他にあまり無い
珈琲カップに夕日が沈む頃に
ふと思い出してくれたらいい

M o m e n t
いつか必ず来るその時まで
M o m e n t
私にできることを為せば良い
M o m e n t
私にできるだけのことを

M o m e n t
薬で貧しさは治せない
M o m e n t
武器で平和を買うことは出来ない
M o m e n t
けれど決して諦めてはならない

M o m e n t
夢はきっと引き継がれるだろう
M o m e n t
私にできることを為せば良い
M o m e n t
私にできるだけのことを

中村さんは、アフガニスタンで、不毛の地に麦を蒔き続けました。中村さんは亡くなりましたが、中村さんの蒔いた麦はしっかりと育ち、中村さんの意思を継ぐ人々が育っています。中村さんは、今も大きな「見えない手」となって、アフガニスタンの人に寄り添っています。

皆さんは、可能性という畑に蒔かれた、一粒の麦です。今は、小さな芽かもしれませんが、踏まれても、踏まれても、大きく育ち、多くの実りをもたらしてください。

皆さんが、自分に添えられてきた無数の「見えない手」が見えるようになること、そして今度は、誰かを、日本を、あるいは世界のどこかを支える「見えない手」となること、世界に実りをもたらす「一粒の麦」となることを期待して、私の式辞といたします。

○参考

カカ・ムラドーナカムラのおじさんー 双葉社
天、共に在り アフガニスタン30年の戦い NHK出版
希望の一滴 アフガン最後の言葉 西日本新聞社